

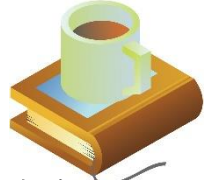


かかやく子ども

～自立と共生の礎を培い、今と未来を豊かで創造的に生きる子どもを育てる学校～

もっとチャレンジ!～かんがえる子ども すすんでする子ども 共に生きる子ども～

旅をする木 旅をする本



10月27日～11月9日は、第71回読書週間です。

長・昼休みのメディアセンター(学校図書館)はたいへん賑わっています。まったく、図書ボランティアのみなさんのおかげです。また、本校では“マイブック”の活動に取り組んでいて、授業中のちょっとした隙間時間に読書する子どもを見かけることもあります。

とは言え、すべての子どもが日ごろから本に親しんでいるとまでは見えません。今どき、学校で教科書を読んで以来、本らしい本を読んだことがないという大人の方も増えているのではないのでしょうか。

本がすべてではないのですが、モットイナイナと思います。読書が人のアタマとココロに多くの栄養を与えてくれると言うのは、かなり確かなことと考えるからです。

今号のタイトルで、すぐに“!”とわかっていただく方がおられたらうれしいなと思います。

「旅をする木」は、アラスカを生きた写真家、星野道夫さんが書かれたエッセーの題名です。

アラスカの自然やそこでくらす人々の姿を中心に三十数話が編まれています。

繰り返し読んでも飽きることがありません。

我ながら、この本のどこにそれほど魅かれるのだろうと思います。

まず、文体や言葉が美しいのです。

その美しさは、星野さんの文才やセンス、それに彼の相当の読書量に依るのだと思います。

ただし、星野さんの文章は、ただ美辞麗句が巧みに並べられているのとは違います。

話すにしても、書くにしても、そこに伝えるなにか、伝わるなにかがあるのかどうか…。結局はそう言うことなのだとは私は自分の経験からよく知っています。

私は、星野さんによって切り取られたアラスカの自然に心を寄せるのでしょうか。だとしても、その大きさの方になのでしょうか。それとも、圧倒する厳しさの方になのでしょうか。

～夜の氷河の凍りついた静けさ。どこかで氷壁が崩壊したのか、雪崩の音が聞こえている。波のようなとどろきはやがておさまり、いくつもの

石がはじける音も闇の中に消えていった。天上には無数の星がまたたいている。おおいかぶさるような、宇宙の沈黙。…中略…すべての生命は無窮の彼方へ旅を続けている。～(「旅をする木 ルース氷河」から)

～小さな仔カリブーの死骸を川岸で見つけたのはそれから数日後のことでした。オオカミかクマに殺られたのか、それとも自然死だったのか、いずれにせよ身体の半分はすでに食べられていました。～(「旅をする木 春の知らせ」から)

本のなかの人々を愛しく思うのでしょうか。

～ぼくはドンが好きだった。どこか、ひとつの人生を降りてしまった者がもつ、ある優しさがあった。～(「旅をする木 白夜」から)

「旅をする木」を読んでいると、常に星野さんのまなざしのやさしさを感じます。

最初の数編は書簡の形になっていて、そこを読むと、寛いだ時間のなかで、好きな人へ手紙を書くような、好きな人から届いた手紙を開くような…、そんな風景が浮かんでくるのです。

星野さんは、スケールのでっかい人です。

でも、それは単に彼の行動力や行動範囲を言うものではありません。彼の大きさは、悠久の時の流れとか無辺の精神性とかを包み込んでいます。

だからでしょうか。星野さんの大きさは、私に敗北感や自分を卑小に思う気持ちをもたらしません。

つまり、今の私は、今の私のスケールで生きるしかないのですが、私だって、いつ、どこで自分の世界を広げる、あるいは、自分の世界を飛び出すことになるか、ならないかは、生きている限り最後の最後までわからないじゃないかと言う気持ちになれるのです。

※ ※ ※

「旅をする本」は、洒落のある悪戯です。

いつのことなのか、どこの誰なのか、星野さんの「旅をする本」のタイトルの“木”の一字に黒いペンで短い一本をつけたし、“本”の字に変えてしまったのです。

その不思議なドキュメントが放送されたのは、星野さん没後20年の2016年だそうです。

私はたまたま今年の夏にアーカイブされたものを観ました。

悪戯書きされたその文庫本の表表紙の裏には「この本に旅をさせてください」と手書きされ、裏表紙の裏には最初から順に、本の持ち主となった人の名前と日付、場所が記されています。

その本は幾人もの人の手を渡っていきます。

あるときは、若い研究者の手に…。

実は、彼女は、ずっと前から星野さんの本の愛読者でした。

彼女は大好きだった祖母の死と接し、その死が遺伝的なものであったが故に、それは自らの生に投影され、ついには深い虚無に囚われてしまったことがあるのだそうです。

彼女は、星野さんの本に導かれるようにしてアラスカを旅します。そして、圧倒的な大自然に佇むうちに、ぼろぼろと涙が溢れ、でもやがてそれが止まったときには、彼女の虚無感はそのなかから一切消えてしまっていたと言います。

それは、彼女がまだ少女だったときの話。

やがて、若い研究者になった彼女の下に「旅をする本」は届けられ、彼女は生命の起源を探る自分の研究のために南極へ赴いたときに、その本を持っていきます。

また、その本は星野さんと同じ、ある写真家から北極点への単独無補給歩行に挑む一人の冒険家へ託されます。

その写真家は、青年時代にエベレストの、当時、日本人未踏峰の頂へのアタック隊に参加したことがあったのですが、彼はそこで、彼を残す全員が深い雪氷の谷底に落ちて亡くなるという凄まじい体験をしています。カメラマンであった彼だけが、ザイルで仲間と繋がっていなかったために、命を落とすことを免れたのです。

でも、彼は、最後の一人が滑落していったとき、互いが互いの目の動きをスローモーションで追っていたことをいつまでも忘れることができずにいます。(彼はその後、同じような登山家の安全をバックアップする仕事に携わります。)

その写真家が、北極点をめざす冒険家に、「決して死ぬな」と言葉にする代わりに、そのとき自分の所有になっていた「旅をする本」を預けたのです。

自力で北極海の氷の上を歩いていく冒険家は、持っていく荷物をグラム単位で削ります。そんななかで、なぜその本を選外にしなかったのか。彼は言っています。

「長いブリザード(暴風雪)でテントのなかに閉じ込められたときの唯一の楽しみにするためと…」

「暴走しがちな自分を謙めるためだと思う。この本を読むこと、持っていることが、なにかしらの余裕を自分に与えてくれる…」

「旅をする本」は、本当にあちこちを旅したことになります。

そのドキュメントのオチは、この洒落っ気のある悪戯が、実はもっと前に誰かが始めたことのコピーであったと言うのですが、それにして「旅をする木」が「旅をする本」になるのは素敵で、またどこかで同じ悪戯が始められているのではないかなどと思ってしまう。

私とその悪戯をすることはありませんが、今でも気が向けば、私の持っている「旅をする木」の本を手元に置いてパラパラとページをめくると、山行きのザックにも無理やり突っ込むものだから(晴れた日の山頂で本を読むのはなかなかよいものなのです。)、もうずいぶんぼろぼろになってしまっています。

子どもたちも、そんな本たちとたくさん出会えるとよいのになと思います。

(清水康行)

